

## 都市空間をめぐるジェンダー地理学の視点と課題

—英語圏諸国と日本の研究動向の検討を通じて—

木 村 オリエ\*

### Geography of Gender and its Perspectives and Issues on Urban Space : Comparative Review of Anglophone countries and Japan

KIMURA Orie

#### Abstract

In this paper, the author examines development of feminist geography in Anglophone countries and discusses on the Japanese urban geography focusing on gender issue. In the 1980s, feminist geographers in Anglophone countries have tackled male hegemony, which has dominated the scholarship, and focused on the home and the local community, which have not been paid attention. It was clarified that women playing the housework had been limited to choose their occupation in a dichotomy. After the 1990s, with the increase of the entry by women into labor market, polarization of female labour force, the urban structure of dichotomy changes and gender interests other dimensions such as race, religion, nationality, and class become a material issue. Feminist geographers find the shift from politics of “redistribution” to politics of “recognition”.

After the 1990s, with diversification of family and feminization of labor force, some Japanese urban geographers have come to pay attentions to women. However, they have only paid little attentions to reproductive labour, such as community activity or housework. In other words, because some geographers catch women as objects, the private sphere in the urban space is still invisible. We should encompass not only women’s paid work, but also unpaid or voluntary work in terms of both ‘economic’ redistribution and ‘social’ recognition to scrutinize transforming suburban space.

Keywords : gender, feminist geography, urban space, redistribution, recognition

#### 1. フェミニスト地理学の関心

本研究は、近年の都市空間を分析・考察する際のジェンダー視点の有効性を、英語圏諸国や日本における地理学研究の動向を通じて検討することを目的とする。これにより、日本におけるジェンダー都市地理学研究の可能性を提示することを目指したい<sup>1)</sup>。

ここで、フェミニスト地理学<sup>2)</sup> (feminist geography) の展開について主に1990年代前半までを概観したい。これまでの社会科学のグランドセオリーは、男性中心的なものであったが、地理学もこうしたグランドセオリーに知の基盤を置く分野のひとつであった (吉田1996)。覇権的な存在である男性によって、「男性的／女性的な」ものを価値付けする背景には、地理学において扱う市民というものが「男らしさの特徴を付与された人間、合理

---

キーワード：ジェンダー、フェミニスト地理学、都市空間、再分配、承認

\*平成17年度生 ジェンダー学際研究専攻

的な行動をする人間、公的領域への所属を許された人間（ローズ 2001）」に限定されていたためである。これに付随して、地理学の知の生産に関しても、もっぱら男性（研究者）の役割とされてきた。

一方で、市民以外の人間は、「他者」とみなされた。この中には、女性や子ども、高齢者や障がい者などが含まれ、特に女性は、「主観的な存在」、「極めて私的な取るに足らない存在」として地理学の領域において排除され続けてきたのである（ローズ 2001）。このような現状の中で、現実の生活全般にわたり認められるジェンダーに基づく不平等や抑圧に関しての疑問や異議申し立てに、その着眼点をおく地理学として誕生したのがフェミニスト地理学であった（Rose 1993）。

フェミニスト地理学は、1970年代後半から、欧米諸国において展開した。その背景には、社会におけるフェミニズム運動の展開に加え、地理学内部においては、それまでの計量的地理学隆盛への批判から生まれ、人間主体に注目した人文主義地理学（humanistic geography）の影響も指摘できる。フェミニスト地理学者たちは、公的／私的空間の二項対立的構造の中で、生産／再生産労働の二重労働を強いられた既婚女性が生活空間において不利な状況にあることに焦点をおき、対象化した<sup>3)</sup>。1980年代～1990年代前半におけるフェミニスト地理学の功績は、経済活動などを通じてジェンダーという要因が、空間の構築を決定する重要な役割を果たしていることを示したことであった。

しかし、1980年代後半から1990年代に入ると、フェミニスト地理学の議論は転機を迎える。その背景には、労働市場における女性の地位向上や、多様な家族形態の増加などの社会的変化にともない、古典的な二元論、つまり男性＝公的領域／女性＝私的領域という二項対立的な構図が対応しきれなくなってきたことがあった（影山 1998）。これにより、人種・階級・ライフステージなどの違いに着目した女性間の差異や多様性に関する議論がフェミニスト地理学のなかで活発化したのである。

これらの研究は、地理学的コンテクストにおいて、アイデンティティの構築に関する検討が重要な課題になりつつあることを示している。当然視されていた男性中心主義に対する「異議申し立て」として女性に焦点を当てていた初期に比べて、ジェンダーを基軸としながらも空間についての多面的な把握がなされるようになった（Bondi 1992）。以下では、このような研究関心に基づきアプローチされたフェミニスト地理学が、近年どのような実証的・理論的展開を見ているのかを、筆者の関心である都市空間をめぐる研究を中心に検討したい。

## 2. 英語圏諸国におけるフェミニスト地理学の研究動向

### 2.1. 都市空間の二項対立的構造に関する実証的研究

1970年代後半以降の先進国で進展したポストフォードイズム体制下では、フレキシブルな蓄積に基づく新たな産業立地の再編や、経済のリストラクチャリングに対応するための多面的で柔軟な労働力の構造が模索された。この構造の中心的な構成要素となったのが、パートタイム労働や、契約社員、下請け、などに従事する女性たちであった。

フェミニスト地理学は、こうした労働市場における男女労働力の再編に注目し、公／私の二項対立的空間構造や地域的文脈の変化について地理学的アプローチを試み、女性たちが都市機能を支える上でいかに重要な役割を担うかを明らかにした。McDowell（1992）は、フェミニスト地理学の主な関心として、1)フレキシブルな生産構造と「労働力の女性化」、2)女性就業の増大による二項対立的構造の行き詰まり、3)エリート／マスの女性間の経済格差、などを挙げている。

Pinch（1992）は、ポストフォードイズムの経済体制下で重要性を高める「フレキシブルな労働力」として増大する女性就業の内実を詳細に明らかにし、都市空間の二項対立的構造が女性（あるいは男性）にとってもはや現実に即したものでなくなっていることを指摘した。そこには、既存の地理学研究が既存のジェンダー役割を前提として、既婚女性はこれまで私的領域において家事に従事する二次的な労働者であり続け（Walby 1989）、それゆえ彼女たちの分節的労働（segmented labour）は賃金労働にさして関与していないとみなされてきたという問題がある。

彼の研究によれば、実際に企業は消費者のニーズの多様化に応えるべく、男性フルタイムから女性パートタイム労働者に置き換えていた。こうした企業側の戦略は、ニーズ対応だけでなく、コスト削減にも確実に貢献して

いた。しかし、彼女たちは依然として労働力の「周縁」であり、柔軟な労働力として、分節化された労働編成に取り込まれるように就業を行っていた。また、女性は男性が主体となる公的領域（職場）と私的領域（家庭）を行き来しなければならない存在であり、時間・空間的な制約の中でさまざまな矛盾に耐えなければならない（Pinch 1992）。

欧米の都市では、それまで低所得者の居住地域であった都心周辺部（インナーシティ）が再開発され新たな中産階級の居住地に再編されるジェントリフィケーション<sup>4)</sup>が進行している。ジェントリフィケーションとジェンダーとの関わりについては、Warde (1991) と Butler and Hamnett (1994) の議論がある。Warde (1991) によれば、ジェントリファイアの女性たちは、高学歴で、共稼ぎであり、専門職や技術職に従事しており、都心に住むことで世帯の生産効率を高めているという。中産階級の再分化によって、階級よりもジェンダーがジェントリフィケーションにとって欠かせない説明変数となっているとし、女性を中心としたグループに着目する必要性を論じている。

だがButler and Hamnett (1994) は、Warde (1991) が扱った中産階級における女性のキャリアと空間的立地の関係性という着眼点を認めつつも、彼がジェンダーの中の階級性という点を完全に欠落させていると指摘する。つまり、ジェントリフィケーションは階級、ジェンダーの双方によって形作られるものであるとしている。女性たちが、就業や育児を両立し、有償／無償労働を接合するために都心に暮らすのは、彼女たちの家族世帯が空間的制約から自由になることのできた特定の中産階級であったためである。それゆえ、ジェンダーを階級とともに重層的に捉える必要性を主張している。

階級と関連し、England (1993) は、フェミニスト地理学を含む既存研究が、過度に女性の一般化、単純化を繰り返してきたことを指摘する。彼女は、大都市圏郊外において展開するようになった企業とそこで雇用される女性たちを対象として、彼女たちは家の近くで就業せざるを得ない状況のもとに、空間的な制約を受けているのかどうかを考察した。

England (1993) は、片親（lone mother）として子どもを育てる事務職の女性たちが、正規雇用の夫を持つその他の女性たちに比べて、経済的な必要性に迫られていることを検証した。その際、インフォーマントたちが親戚や隣人などの社会関係にうまく依存しながら仕事と家事を両立させている特性を挙げ、子育てが女性の就業を妨げる主な要因ではないことを主張している。彼女たちにとっては、キャリアを中断させるというかたちで近隣の職場へ転職するよりも、長距離通勤を行ないながら従来の職を継続させる方が、むしろ安定した生計を保つことができるとした。このことからEngland (1993) は、既存の研究のほとんどが1970年代の統計資料と視点に基づく「古典的な」<sup>5)</sup> 女性就業研究であり、現状を的確に反映していないと指摘する。

また、McDowell, Ward, Fagan, Perrons and Ray (2006) は、新自由主義的な福祉政策への関心から、固定的なジェンダー役割を条件とした二項対立的構造の限界を示す。著者たちは、既婚女性たちの働きが家族への「愛」の労働（labour for love）として集約されることで、国が行なうべきさまざまなサービスの代替とされていることを詳細に指摘し、女性たちの働きが都市構造の維持に大きく関与していることを明らかにした。そしてその結果として、彼女たちの「愛」の労働が、保育施設やサービスの整備など都市のメンテナンスにかかるコストを削減していることを指摘する。

McDowellたちは、女性就業が増大し、男女の職業的地位や職種が多様化する反面、育児などの福祉サービスの提供が減少している現状は、都市計画に関わる重要な問題として早急に取り組むべきであるとする。また、コスト削減のために、福祉政策を女性たちの過重労働に任せるような政策を厳しく批判し、都市空間の二項対立的構造の見直しを促している。

このように、フェミニスト地理学者は、従来の地理学者による男性中心的で覇権主義的な研究に対抗しながら、女性の経験にもとづく新たな実証的研究を蓄積してきた。一方で、家父長制の抑圧からの解放、女性の普遍的な経験の共有を強調するあまり、地域的コンテクストに見いだされる女性（男性）の多様性や、フェミニスト地理学者自らによって周辺に置かれてしまった主体の存在に気がつかなかったという指摘もある（Longhurst 2002 ; Bondi 2004）。しかし、上記の研究の中では、都市空間の形成やその利用の主体となる女性たちが、階級や家族との関わりにおいて多様であり、これまでの固定的、二項対立的なジェンダー観では捉えきれないことが明らかにされている点で、既存研究の着眼点を深化させた意義深いものであるといえよう。

## 2. 2. 都市空間の中の差異に関する理論的研究

公／私の二項対立は、民族や文化によって必ずしも同じものを意味しているとは限らない。それにも関わらず、女性というカテゴリーにおいて普遍的に共有されるであろうと思われていた再生産労働という概念が、人種の問題を曖昧なものとしていた (Mackenzie 1999)。これまでのフェミニスト地理学者の研究が、もっぱら家族をもつ白人中産階級の女性しか見てこなかったことは、都市の貧困層や同性愛者へのまなざしを欠落させていたという批判にもつながったのである (Valentine 1993)。

「白人中産階級中心的な」フェミニスト地理学のまなざしに対する反省は、フェミニスト地理学者たちに、意図せずして画一的であった知の生産体系を改めるきっかけをつくりだした (Merrifield 1995a)。そもそもフェミニスト地理学における知の生産の意義は、公／私的領域におけるジェンダーバイアスや男女間の関係性に焦点を当ててきたフェミニズムと、地域的な差異や空間的パターンに焦点を当ててきた地理学との相互補完的関係の実現にあった。日常生活における発見、コンテクストへの理解とともに、差異への関心を基軸としながら発展してきたフェミニズムと、地理学の両者の特性を併せ持つフェミニスト地理学は、地理、社会に起因するジェンダーの現象把握に努めてきた (Hanson 1992)。

これまでの地理学が研究者と研究対象者との固定的な位置関係の中で、「総合的で、絶対的な」知の生産を目指してきたのに対し、フェミニスト地理学は流動的な位置関係の中で「部分的で、相対的な」知の生産を目指してきた。それゆえ、フェミニスト地理学は、時間と場所に根ざした知を生産することが求められる (Rose 1997)。「女性であることは一枚岩ではない」というフェミニスト地理学者の反省から、1990年代以降は民族・宗教・国籍・階級などのジェンダーに関わるさまざまな指標への関心により、地理学的コンテクストにおける多元的なアイデンティティ構築の把握<sup>6)</sup>やそれを通じたローカルな知の生産が試み始められた。

Dyck (2005) は、フェミニスト地理学がこれまで基準としてきた白人中産階級などの画一的で固有なセクシズムとは異なる「反覇権的な」セクシズムに注目する必要性を述べ、ジェンダー、階級、人種と交差した差異への関心が地理学に芽生えていると指摘する。例えば、バレンタイン (1998) はレズビアンを日常生活を対象に、異性愛者によってつくり出された覇権的な都市空間の構造と抑圧の恐怖に晒される彼女たちの生活を明らかにし、Anler (1992) は、暴力や偏見から逃れ、生活を続けるための男女同性愛者によるインフォーマルなネットワークの構築と生活空間の獲得をめぐる戦略的なプロセスを考察した。また、これまで周縁に置かれてきた主体の混在する、象徴的な空間を可視化するための景観研究なども盛んに行なわれ始めた。こうして知覚や身体性など、これまでの地理学研究では扱われにくかった表象に着眼を置いた研究<sup>7)</sup>も多くなされるようになっていく (Dorling and Shaw 1993; Bondi 1998)。

このような研究動向の転換の背景には、文化論的転回の浸透に影響されつつあったフェミニスト地理学研究が、多様化する女性の生き方を従来の男性中心的構造ばかりからではなく、空間構築をめぐる保持されてきた固有のイメージからも解放しようとする研究の展開を目指すようになったことがある (Domosh 1998; Buzar, Ogden and Hall 2005)。

確かに、これまでの欧米諸国における都市空間は、職住分離構造と生産／再生産領域の分化とともに特徴付けられてきた。このような都市構造の成り立ち (特に郊外の誕生) は、労働力の再生産に関する社会的革新、「倫理」の保持、男性たちだけの労働組合における家族賃金の問題、家事・育児の向上に関する女性たちの議論を解決するために生み出されたものである (Bondi and Rose 2003)。1960年代以降のフォーディズム体制の確立が、諸問題の解決のための「装置」としての都市システムを望ましい形に強化し、こうした局面においてフェミニスト地理学者が近代核家族とジェンダー役割分業への関心を深めていったことも事実である (McDowell 1991)。

だが、経済的な問題と郊外の社会的孤立、つまり異性愛核家族の女性たちの生活に焦点を当てるあまり、都市空間の画一性を強調し続けたという傾向も批判されるに至っている。Bondi and Rose (2003) は、女性たちが都市から迫害されてきたという見解の一方で、彼女たちが都市を利用・占有しているという Wilson (2001) の研究に代表される見解に着目し、近年のフェミニスト地理学研究において「分析的乖離 (analytical divide)」が生じていると指摘する。このような乖離が生じる背景には、従来フェミニスト地理学者が「叙情的 (affective)」で「抑圧された」対象としての白人女性の経験にのみ焦点を当ててきたのに対し、抗争や時には占有によって積極的に権利を獲得していく主体 (Wilson 2001) としての女性の経験にも等しく焦点を当てるべきだとする新た

な認識への転換がある (Bondi and Rose 2003)。

フェミニスト地理学者における「分析的乖離」を通じて、ジェンダー不平等をめぐる地理学が直面する主題は、白人中産階級を対象とした（経済的な）再分配<sup>8)</sup> (redistribution) の問題から、多様なアイデンティティ、実践を対象とした（尊厳ある生活の実現の）承認 (recognition) の問題へとシフトしている (Bondi and Rose 2003)。都市空間における権力関係は、常に流動的で不確かなものであり、抑圧／解放の可能性が常に交錯している。それゆえ、人種、階級、セクシュアリティを対象としたジェンダーの問題は、固有の空間や場所に根ざして密接であり、空間的な議論と切り離せないのである。

### 3. 日本における都市空間をめぐる地理学・ジェンダー地理学の研究動向

#### 3.1. 就業・生活行動の実証的研究

英語圏諸国のフェミニスト地理学、ジェンダー地理学研究の近年の隆盛に比べて、日本の地理学ではジェンダーに着目した研究の蓄積はまだ少ない。その中で、女性や主婦などを対象とした研究、ジェンダーをキーワードとする研究、そして日本のフェミニスト地理学者たちの成果について触れることにする。

日本の都市空間をめぐる地理学研究における女性を対象とした研究では、大きく分けて二つの側面からのアプローチが試みられてきた。一つは、就業機会や通勤移動など主婦の就労すなわち生産労働に関するものであり、もう一つは、家事や地域活動など主婦の再生産労働をめぐるものである。前者の女性就労をめぐる、神谷ほか (1990) は、育児と近居との関係性を明らかにし、男性に比べて育児や家事による制約を受けやすい女性の就業について詳細に検証し、谷 (1998; 2000) は主婦が結婚・出産というライフイベントを期に自ら退職することで、夫の職を優先的に支えていく姿勢が都市システムの構成要素となっていることを指摘している。主婦たちが多く従事する都市郊外のパートタイム労働に関しては、90年代後半以降の企業による非正規雇用へのシフトとともに、若干の変化が見られることが指摘されているが、職種は依然として限定的であり、サービス職や、中程度の専門性で従事できる労働が大半を占めている (武石 2002)。また、有留・小方 (1997)、川瀬 (1997) は、女性が子どもの育成に合わせて、家事の制約のもとに自宅近隣のパートタイム労働を「柔軟」に志向することを明らかにした。

都市空間をめぐる地理学研究の中で、後者のテーマ、すなわち主婦の再生産労働に関しては、家事や育児などを背負う主婦の日常的役割が持つ制約についての把握がなされている。岡本 (1995) は、都市の職住分離構造を、女性の持つジェンダー化された家族役割の側面から批判的に検討し、川口・神谷 (1992)、宮澤 (1998) など時間地理学的手法を用いた研究では、都市生活を時空間パターンとして確認することで、女性をはじめとする特定集団の生活行動に対する制約を明らかにし、社会参加への女性の意思決定に貢献し得るとしている。

また、岡本 (1998) は、地理学で対象とする都市化や都市におけるパーソナルネットワーク研究の多くにとって女性・主婦の存在が不可欠であることを指摘し、隣接する分野に頼るばかりではなく地理学においても主婦の家庭生活に意識的になることの重要性を指摘する。また、由井 (2003)、若林 (2004) は、女性主体への注目に加え、家族形態の多様化を考慮し、女性の居住地や就業地選択のパターンから都市システムに及ぼす女性の生活行動の影響を検討している。

#### 3.2. ジェンダー概念の導入と都市住民の可視化

都市空間の変容を考えようとする際、これまで日本の地理学研究において関心の外にあった女性たちに注目すること、とりわけライフサイクルによる変化に対応しつつ、就業と家事役割をともに果たしながら、積極的に地域の形成に携わってきた、主体としての主婦に焦点を当てることは重要である。だが、これまで日本の地理学における女性を対象とした分析においては、彼女たちの生産活動と再生産活動を別々に切り分けて描き出そうとする傾向が強かった (西村 2002)。こうした分析視角では、都市空間の変容にともなう主体としての意識や行動を断片的・固定的にしか捉えることができず、都市生活における住民の日常実践をめぐるダイナミズムを十分に汲み取ることは難しくなる (吉田 2002)。

すでに述べたように、再生産労働、およびそこから派生するジェンダー概念を扱った研究は、日本では、まだ

決して多くないが、1990年代から、空間における生産/再生産の分離、そこで序列化される両者の不平等な権力にもとづく関係性に着目したいいくつかの先駆的研究が蓄積されている（吉田 1993；田子 1994；松井 2000）。例えば、影山（1998；2004）は、郊外のニュータウン地域の市民活動に焦点を当て、主婦たちの地域における実践・認識を分析し、生産領域/再生産領域の接合を目指そうとする彼女たちの活動を「再生産活動を越える可能性を持つもの」として着目し、評価している。また吉田（2006）は、そもそも生産から切り離された郊外が、防犯の名のもとに女性たちの生活を囲いこんでいる状況を、家父長制を基盤として発展してきた都市政策や住宅政策とともに、批判的に論証している。村田（2000）は、都市空間において男性が必ずしも一枚岩ではなく、ジェンダー規範の中で秩序化された都市空間において、ふるまいや存在を制約され得ることを指摘する。

これらの成果は、従来の研究では明らかにされてこなかったジェンダー構造の変化とこれにともなう新たな都市形成の可能性を実証的に明らかにするものといえる。それはこれらの研究成果が、これまで地理学において自明の前提として見過されてきた家父長制や核家族における家庭内役割、女性の二重労働などの都市空間をめぐる不平等、これを可能にさせてきた権力性を浮き彫りにし、この状況に依存し続けようとする都市空間の構造を問題視しているためである。

近年、社会の構造変化にともなって、都市空間を支えてきた既成の制度や規範は次第に不適切なものになってきた。このような事態は、家族形態や個人的アイデンティティ、他者との社会関係や、労使関係など、個々の主体の生き方にかかわる側面の再定義付けを強いている（吉田 2002）。このような変化への地理学的な関心から、日本では1990年後半から表象や景観、広告（ポスター）など都市空間におけるシンボリックな対象から権力性を読み取る研究も行われてきた。Murata（2005）は、地理学におけるジェンダー研究は、人種、階級、異性愛といった覇権主義的な概念に影響を受けてきたことを指摘する。それゆえ、このような概念の中で女性／男性というカテゴリーを普遍的で首尾一貫した主体として論じることは、ジェンダー関係を規定し、男性主義的地理学を再強化してしまうことを危惧する。

日本におけるめぐるジェンダー地理学研究においては、十分に解明されていない課題のひとつとして、セクシュアリティと都市空間の問題がある。これまで取り組まれてきた家父長制を背景とした都市の二項対立構造に対して、セクシュアリティの導入により、ジェンダーをめぐる重層的に交差する指標をいかに明示できるかが、今後のジェンダー地理学の展開に影響を与えることは明らかであろう。

#### 4. 都市空間をめぐるジェンダー地理学の視点

これまでの検討をふまえ、欧米のフェミニスト地理学と日本の都市空間をめぐるジェンダー地理学研究を対比して、今後の課題について比較を試みたい。

フェミニスト地理学者によって、既存の都市イデオロギーを批判的に再考する研究がなされてきた。そこでは、マジョリティであり、生産労働の担い手である「健康な、成人の、異性愛主義的な」男性を中心的な主体として捉えてきた従来の研究に対して、女性など、見過ごされ続けてきた存在への認識を改めて問いなおすことで、都市空間の権力関係を浮き彫りにしようとするジェンダーの視点からの研究が行なわれてきた。フェミニスト地理学から、新しい成果が生まれつつあるのは、従来の研究に欠落してきたジェンダー概念の導入により「他者」として扱われてきた多様な主体の考察に焦点を当てているためである（影山 2005）。

都市空間とアクターとしての女性を的確に捉えようとする研究は、英語圏諸国におけるフェミニスト地理学において活発に展開されていた。1970年代の女性の就業に関する研究に端を発し、1980年代の職住分離とさまざまなレベルでの二項対立構造の実証的研究を基盤として、最近10年間で人種、階級、セクシュアリティなどの重層的な座標軸をジェンダー構造にクロスし、分析するまでに至った。

一方で、日本ではこのような英語圏の流れを受ける形で、1990年前半より都市地理学および行動地理学の分野を中心として就業に関わる女性の生産領域への進出や、育児・家事など再生産領域における生活行動パターンの実証的研究が積み重ねられてきた。しかし、その流れは英語圏諸国におけるフェミニスト地理学と異なる様相を呈しているように思われる。先に述べたように、Bondi and Rose（2003）は、ジェンダーと空間をめぐる「再分配」から「承認」へのポリティクスの移行の問題について語っている。しかし、日本の地理学においては、経済

的「再分配」についてさえ未だ十分な議論が交わされているとはいえ、「承認」に至っては問題提起すらほとんどなされていない。この背景には、1)都市空間や経済的構造の特質の違い、2)女性をめぐる経済的・社会的地位の落差、これらを取り巻く制度的な違いなども作用していると考えられる。前者に関して、欧米に比べ均質性の高い日本の都市社会においては、都市開発問題などにエスニシティや階級が反映されにくいという側面も見逃すことはできない。だが、特に後者に関していえば、家計補助的な女性の働き＝パートという概念が当然のように定着しており、当事者である女性たちからも十分に要求事項として問題化されないことが実情である。ゆえに、英語圏諸国のフェミニスト地理学の動向とは異なり、日本においては再分配と承認は、ともに関連しながらジェンダー地理学の課題追求がなされるべきであろう。

最後に加えておきたいが、日本の地理学においては、都市空間とジェンダーをめぐる背景にある家父長制的構造、つまり空間形成に影響する権力性の問題への認識が欧米に比べて希薄であるように思われる。吉田（1996）が指摘するように、男女の不平等性を空間的事象として機械的に表現するというだけでは、現実の都市空間を生きる女性（男性）たちにとって、その改変の手がかりを得ることは難しい。ジェンダーに関する地理学的な議論に関しては、こうした属性を持つ人々（女性、社会的・文化的マイノリティなど）の専売特許という意識が研究者の中に根強い。地理学という学問領域そのものが長きにわたり男性中心的なものとしてジェンダー化されていたという背景の中で、日本の地理学者たちが自らの立場性（ポジショナリティ）を強く自覚することが求められる。

### 【謝辞】

論文執筆にあたり、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科の熊谷圭知先生をはじめとする地理学教室の諸先生方、國學院大學経済学部田原裕子先生より御指導頂きました。また奈良女子大学文学部の吉田容子先生からはジェンダー地理学の動向に関して有効な御助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- 有留順子・小方登 1997. 性差からみた大都市圏における通勤パターン—大阪大都市圏を事例として—, 人文地理 49 : 47-63.
- 岡本耕平 1995. 大都市圏郊外住民の日常活動と都市のデイリー・リズム—埼玉県川越市および愛知県日進市の事例—, 地理学評論 68 : 1-26.
- 岡本耕平 1998. 主婦の日常生活への地理学的アプローチ, 地理科学 53 : 200-205.
- 影山穂波 1998. ジェンダーの視点から見た港北ニュータウンにおける居住空間の形成, 地理学評論 71 : 639-660.
- 影山穂波 2004. 『都市空間とジェンダー』古今書院.
- 影山穂波 2005. フェミニスト地理学—ジェンダー概念と地理学, (加藤政洋・大城直樹編著 2006. 『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房) : 251-262.
- 神谷浩夫・岡本耕平・荒井良雄・川口太郎 1990. 長野下諏訪町における既婚女性の就業に関する時間地理学的分析, 地理学評論 63 : 766-783.
- 川口太郎・神谷浩夫 1991. 都市における生活行動研究の視点, 人文地理 43 : 44-63.
- 川瀬正樹 1997. 世帯のライフステージから見た千葉県柏市における既婚女性の通勤行動の変化, 地理学評論 70 : 699-723.
- 武石恵美子 2002. 雇用システムの構造変化と女性労働, 経済地理学年報 48-4 : 33-48.
- 田子由紀 1994. 工場進出に伴う就業女性の生活変化に関する時間地理学的考察, 人文地理 46 : 20-43.
- 谷謙二 1998. コーホート規模と女性就業から見た日本の大都市圏における通勤流動, 人文地理 50 : 1-21.
- 谷謙二 2000. 東京都大都市圏郊外居住者の結婚に伴う職住関係の変化, 地理学評論 75 : 623-643.
- 西村雄一郎 2002. 職場におけるジェンダーの地理学—日本での展開にむけて—, 地理学評論 75 : 571-590.
- 松井三枝 2000. 紡績工場の女性寄宿労働者と地域社会との関わり, 人文地理 52 : 483-497.
- 宮澤仁 1998. 東京都中野区における保育所へのアクセス可能性に関する時空間制約の分析, 地理学評論 71 : 859-886.
- 村田陽平 2000. 中年シングル男性を疎外する場所, 人文地理 52 : 533-551.
- 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚章編集 1997. 『人文地理学辞典』朝倉書店.
- 由井義通 2003. 母子生活支援施設からみた都市の住宅問題とその地域性, 地理学評論 76 : 668-681.

- 吉田容子 1993. 女性就業に関する地理学的研究－英語圏諸国の研究動向とわが国における研究課題－. 人文地理 45: 44-67.
- 吉田容子 1996. 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論 69: 242-262.
- 吉田容子 2002. 男性主義的な空間への批判－日本の大都市郊外ニュータウンを事例として－. 奈良女子大学文学部研究年報 46:73-89.
- 吉田容子 2006. 郊外空間のジェンダー化. 地理科学 61: 200-209.
- 若林芳樹 2004. ライフステージからみた東京圏の働く女性と居住地選択. (由井義通・神谷浩夫・若林芳樹・中澤高志共編著『働く女性の都市空間』古今書院): 76-89.
- Anler,S. 1992. Gender and space: lesbian and gay men in the city. *International Journal of Urban and Regional Research* 16: 24-34.
- Bondi,L. 1998. Gender, class, and urban space: public and private in contemporary urban landscapes. *Urban Geography* 19:160-185.
- Bondi,L. and Rose,D. 2003. Constructing gender, constructing the urban: a review of Anglo-American feminist urban geography. *Gender, Place and Culture* 10:229-245.
- Bondi,L. 2004. 10th anniversary address for a feminist geography of ambivalence. *Gender, Place and Culture* 11:3-15.
- Butler,T. and Hamnett,C. 1994. Gentrification, class, and gender: some comments on Warde's "Gentrification as consumption." *Environment and Planning D: Society and Space* 12: 477-487.
- Buzar,S.,Ogden,P.,and Hall,R. 2005. Households matter: the quiet demography of urban transformation. *Progress in Human Geography* 29: 413-436.
- Dorling,D. and Shaw,M. 1993. Geographies of the agenda: public policy, the discipline and its (re) 'turn'. *Progress in Human Geography* 26: 629-646.
- Dyck,I. 2005. Feminist geography, the 'everyday', and local-global relations: hidden spaces of place-making. *The Canadian Geographer* 49: 233-243.
- Domosh,M. 2000. Geography and gender: home, again? *Progress in Human Geography* 22: 276-282.
- England,K. 1993. Suburban pink collar ghettos: the spatial entrapment of women? *Annals of the Association of American Geographers* 83: 225-242.
- Fraser,N. 1996. *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*. Routledge, UK. フレイザー,N. 仲正昌樹監訳 2003.『中断された正義－「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房.
- Hanson,S. 1992. Geography and feminism: worlds in collision? *Annals of the Association of American Geographers* 82: 569-586
- Longhurst,R. 2002. Geography and gender: a 'critical' time? *Progress in Human Geography* 26: 544-552.
- Mackenzie,S. 1999. Restructuring the relations of work and life: women as environmental actors, feminism as geographic analysis. *Gender, Place and Culture* 6:417-430.
- McDowell,L. 1991. 'Life without father and Ford: the new gender order of post-Fordism.' *Transactions, Institute of British Geographers* 16: 400-419.
- McDowell,L. 1992. Doing gender: feminism, feminists and research methods in human geography. *Transactions, Institute of British Geographers* 17: 399-416.
- McDowell,L., Warde,K., Fagan,C., Perrsons,D. and Kath,R. 1992. Connecting time and space: the significance of transformations in women in the city. *International Journal of Urban and Regional Research* 30: 141-158.
- Merrifield, A. 1995a. Situated knowledge thorough exploration: reflections on Bunge's geographical expeditions. *Antipode* 27:29-70.
- Murata, Y. 2005. Gender equality and progress of gender studies in Japan geography: a critical overview. *Progress in Human Geography* 29: 260-275.
- Pinch,S. 1992. Flexibility, gender and part-time work: evidence from a survey of the economically active. *Transactions, Institute of British Geographers* 17:198-214.
- Rose,G. 1993. *Feminism and Geography: The Limits of Geographical Knowledge*. Polity Press, UK. ローズ,G.著, 吉田容子ほか訳2001.『フェミニズムと地理学－地理学的知の限界』地人書房.
- Rose,G. 1997. Situating knowledges: positionality, reflexivities and other tactics. *Progress in Human Geography* 21-3: 305-320.
- Soja,E. 1996. *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-and-Imagined Places*. Blackwell, US. ソジャ,W.E.加藤政洋訳2005.『第三空間－ポストモダンの空間論的転回』青土社.
- Valentine,G. 1993. (Hetero) sexing space: lesbian perceptions and experiences of everyday spaces. *Society and space* 11: 392-413.
- バレンタイン,G.著, 福田珠巳訳 1998. (異)性愛化した空間－日常空間に対するレズビアン知の知覚と経験－.空間・社会・地理思想 3:77-95.
- Walby,S. and Baguley,P. 1989. Gender restructuring : five labour-markets compared. *Environment and Planning D: Society and*



*Space* 7: 277-292.

Warde,A. 1991. Gentrification as consumption: issue of class and gender. *Environment and Planning D: Society and Space* 9: 223-232.

Wilson,E. 2001. *The Contradictions of Culture: cities, culture, women*. Sage, UK.

### 【註】

- 1) 本研究では、社会的・文化的な性を起因とした事象を、地理学的見地から探求しようとする研究全般をジェンダー地理学とする。この中にはフェミニスト地理学も含まれる。
- 2) フェミニズムの影響を受けた地理学者が、この理論を応用していくという意味を強調しようとする吉田（1996）の定義を用いる。本研究では、英語圏諸国でのフェミニスト地理学（feminist geography）の定訳を変更しない。また、ここで指すフェミニスト地理学とは、研究者の男女の区別なく、ジェンダー地理学の範疇にありながらジェンダーから生ずる権力性に特に自覚的であり、知見を通じて男／女の権力関係の改変を目指していこうとする研究のことである。
- 3) フェミニスト地理学の初期の研究対象は私的領域に焦点をあてるものが多く、公共サービスへのアクセス、家庭と職場の距離など、空間的分断がメインテーマとなった。これらの研究は、主婦や母親といった女性に課せられた性別役割への関心から「女性の地理学」と呼ばれた。
- 4) インナーシティなどで見られる近隣地区の変化形態の一つ。労働者階級や貧困層が多く住む小住宅地区が荒廃し、スラム化が進む。次の段階として、小住宅地区の買収や賃貸契約の非更新によって貧しい住民を退去させ、不動産開発業者などがマンションや高級戸建住宅に建て替える。こうした住宅には、中心業務地区へのアクセスを求めて、所得階層の高い夫婦や核家族世帯が流入する。その結果、地区住民の社会的・経済的地位と地区の建物構成に急激な変化が生じる現象（山本ほか1997）。
- 5) 女性たちが、伝統的な核家族スタイルにおいて、家庭内役割を遂行させることができるような近距離の職場を選択し、就業するパターンを指す。
- 6) 「支配／従属の構図からの解放」という点において、フェミニスト地理学者は、ポストコロニアリズムからの影響を強く受けている。権力関係を通じた社会的関係構築の研究に関しては、90年代より脱欧米主義的な枠組みが模索されている。
- 7) 既存権力に支配された空間に対して、人間の生きる場所、多様なアイデンティティなどの要素を含む「第三の空間」（ソジャ2005）についての研究も行われはじめている。
- 8) フレイザー（2003）では、「再配分」と訳されているが、本稿ではredistributionの定訳に従い「再分配」とした。